

た。

しかし、就職して一年を経ると、この受け売り説に疑問を持たざるを得なくなった。というのは、私のこの話をよそに、私の受持っている子どもたちは、六歳六ヶ月という年齢を待たず、ほとんど読み書きを始めているのである。これは何を意味するのであろうか。字を早く覚える子どもに問題があるのか、あるいは六歳六ヶ月という心理学者が示す数字に問題があるのであらうか。

この場合問題となることは、子どもの育つ環境である。私の扱っている子ども、すなわち中流階級の家にある子どもの場合にのみいわれることであるのか、一般に現在の子どものような傾向にあるのか。また、母親の教育に対する関心度、兄弟の有無、読書の心を促す事物の有無、読書以外に興味をひく事物の多少、身体的発達との度合、その他種々の条件が原因すると思われる。

次に、六歳六ヶ月という数を結論づけさせた対象となっている子どもは日本人ではないことである。したがって、環境も異っており、身体的発達もいくぶん異っているであろう。また、これらの研究がなされたのは何年か前のことであるから、現在の子どもの条件と一致するか否かは疑問である。残念ながら現在、とくに日本の子どもを専門的に研究した書物を手にすることができない。

このように、書物をそのまま現実の状態において考えるとき起る矛盾について、再考慮しなければならぬことを痛感するものである。

私は、現在の日本における幼児の読書の実態に触れ、地域別に前述の諸問題を考慮しつつ調べてみたいと思っている。そして年少組でありながら、すでに読書に積極性を示す子どもに対し、子どもの

成長を考えながら正しい指導ができるよう勉強してゆきたい。

(幼稚園教諭・東京)

K子ちゃんの経験を通して

毛利倫子

六月のある日、電気のついた保育室で仕事をしていた私が、なにげなく子どもの作品を入れてある戸棚をあげて、キヤッー！と跳びのいてしまった。戸棚の奥に光る二つの目、動いている黒いもの、おそろおそろ電気を近づけてみると、そこに正体を現わしたのが昨日から行方不明の黒兎の仔だった。おびえる目、おなががすききっているとみえ元気がない。まもなく人參の葉を夢中で食べはじめた兎を見つめている私の頭の中には、四月からのK子ちゃんの行動がよみがえってきた。あくる日、いつものように登園したK子ちゃんに「昨日先生が仕事をしていたら、戸棚の中で、あけてください」と声が出たのよ。」と話しかけてみると、急に思い出したように手をうって「あっそうです。あのね。兎がどこかへ行くといけな」と思って私が戸棚の中へしまっておいたのです。」と話しました。「そう K子ちゃんしまっておいたの。でも兎さん、戸棚の中は苦しいからもう入れないでくださいって言ってたわよ、可愛そうね。」というとうわかったといった表情でうなずいていた。

三十年四月、二年保育児を受け持ったときのK子ちゃんの記録の一コマで、ここでK子ちゃんを紹介すると、家庭は両親、祖父母、叔

父、叔母、それに二歳になる弟、おとなの中で育ったとゆう以外、とくに問題もない。ただ出産のときに視神経を圧迫され、両眼麻痺、症腫孔散大症で明暗による瞳孔の調節がとれない。視力は年が小さいので正確につかめないが、左指四米右指二米とゆう診断書が提出されていた。最初はK子ちゃんを見る私の目も、眼が悪いとゆうところにあつたので、身仕度の全然できないのを手伝い、集るときは最前列に並ばせるようにしていた。けれど入園当初の緊張がとれると、気の向くままにどこへでも行ってしまふ放浪性がでてきた。都心地で公立小学校に併設されている幼稚園（当時中学校も一しょだった）、鉄筋三階建の校舎内を、K子ちゃんにはなんの拘束もなく、あるときは地下室をのぞき、あるときは二階三階屋上までも、衛生室といわず給食室といわず、校長室、中学の部屋と、ひとり歩き廻っていた。それぞれ級を担当して手一ぱいの幼稚園の先生がた、小学校、中学校、用務員、作業員のかたちまでが、みつけると私のところまで連れもどしてくれた。それも歩くだけでなく、目につくもの、興味のひかれるものをいたずらして歩き、いたるところ危険をとまなう環境なので、ある日の私の日誌にこんなことが記されていた。『此の頃私の神経の九十九%までがK子ちゃんにとられてゐる——と。

今でも忘れられないのは帰園のまぎわにK子ちゃんの姿が見えなかったとき、やっと集団生活に慣れたばかりの三十三人の子どもを放つてK子ちゃんを探しにとびださなければならぬ進退きわまつた私、そしてとつさに頭をかすめる悪い想像、手洗いの戸を片づければから叩いてあけていった気持、たまたま一ヶ所あかなかったときのショック！

K子ちゃんが欠席したときは母親のことば通り、偽りなくほっとして忘れ物をしたような気持だった。

私の頭の中にはしだいにこんな疑問も起つてきた。このままこうしてK子ちゃんを普通児の中へ入れて教育していくこと自体、間違つてはいししないだろうか。三十三人の子どもたちはみな私の愛情を独占したいのが心理で、私の気持は三十三人の上に平等におかれてゐる自信はあつてもK子ちゃんに手がかければ、不満を表明する子ども、さらに心ない親までもある。

私はK子ちゃんの行動の原因をつかもうと観察し記録し家庭とも密に連絡をとつた。そして教育相談にも母親とともにいった。知能テストの結果は鈴木ビネーで八十九とゆう指数がでた。記録を見せて相談すると、知能の遅れた子どもの特徴とまったく一致すること、そしてこの程度では精神薄弱児の施設では受け入れてくれないし、現在の実状としては、団体生活に適さなければ幼稚園をやめさせるか、御苦労でもそのままつづけて幼稚園で教育する以外方法はないでしようとの結論に接した。K子ちゃんは出産のとき、眼と同時に頭脳にも影響を受けて生れた不幸な子どもといえましよう。

私は二年間、K子ちゃん個人の教育とゆうことも大きな問題だったが、このような子どもを普通児の中に入れて教育していくとゆうことに、さらにもっと大きな問題があると思つた。団体生活に適応できないからといって登園を止めれば、K子ちゃんのように生れあわせた子どもはどうして教育されるのであろう。

私はそのとき当面の問題として次のような考えのもとに学級経営を続けるしかなかった。このような子どもに巡りあつたとゆうこの

級の環境を、より教育的に活用していけばよいのではないか。この級を小さい社会と考えれば、社会にはいろいろな形で不幸な人がいるとゆうことを子どもに知らせて、その不幸な人に同情する気持を養い、その人をおかばつとも仲良く生活するとゆう幼児経験を通して、将来社会人としての生活の中で、そのようなことが少しでも理解されればよいと。

こうして二年間の保育を終え、特殊学級は区内に一ヶ所でも三年生以上とゆうことなので、現在併設の小学校に入学したが、K子ちゃん本人にも、他の子どもにもプラスされる面は少ないといった状態である。特殊学級の増設が要求されている今日、K子ちゃんばかりでなく、いろいろなケースで不幸な幼児期の子どもを専門に教育する施設（幼稚園）を設けて、現場の教師の悩みと子どもを救ってほしいと願わずにはいられない。

ひらがながどうやら書いて、先生にお手紙がだせるようになりました。とゆう夏休みの母親からの便り、私には親と同じ気持ちで喜べないものが残っている。それはK子ちゃんがこのままはたして立派に成長していくのだろうか、とゆう不安が依然として私の心をくもらせるからです。

（幼稚園教諭・東京）

女性である幼稚園教諭の

立場から思う

岩崎里美

教育は、人間活動の一分野であるから、それがどのような年齢層を対象とする場合でも、その生活の基盤となっている家庭環境の理解が伴わなければ、十分な成果が望まれないことは論をまたないところであります。

かざられた家庭生活だけの体験、しかしそのゆえにこそ、その育ちの背景をそのままに持ちこむ幼児を対象とする幼稚園教育は、他のどの段階の教育の場におけるより家庭に対する深い理解が要求されるのはまた、当然であります。

私も幼児教育について専門的知識と技術を広く研究し教養を深め、たゆみない愛情と努力の精進を続けているのは、これも当然のことであります。

ところで、その研究、努力の角度と深さが前述の要求にこたえる方向に向けられ、程度が充分であるかといえ、それはかならずしも「そう」とはいえないと反省するのであります。

なぜなら今日、相当数の家庭は、これを構成している諸要素が複雑多岐であり、人々は頭の中の民主主義と、日常生活の中の封建性が不調和のままの生活を営んでいます、それがどのように幼児に影響を与えているか、またその影響を取りのぞくにはいかにすべきか、これらの点についての私どもの反省と、努力に欠けるところがある、と考えられるからであります。このような不安定な生活の中で、一番当惑し揺れているのが主婦すなわち母親たちではないでしょうか。

考え方が感情的で、自己中心から脱却できにくい女性の通有性。嫁、姑、小姑、あるいは子どもと継父母間のトラブル、夫婦の不和など、家族構成上の問題。社会的には経済的不安、女同志の噂話の